

# 「戦いすんで日が暮れて」 異常に低い投票率の背景

ジャーナリスト

三木寛郎

## 「戦いすんで日が暮れて」

直木賞を受賞した佐藤愛子氏が実体験を元に書いた小説のタイトルに「戦いすんで日が暮れて」がある。

石破茂総裁・首相就任から僅か8日後の10月9日、額賀議長は本会議で解散詔書を読み上げ、戦後最短となる衆院解散が宣言され、「10月15日公示、27日投開票」とする衆院選日程が閣議決定された。その短兵急な展開に、野党側は右往左往し、与党側も裏金問題（自民党内では収支報告書の不記載と言うらしい）に關与した議員たちが公認を外されるやら、「党勢拡大のための活動費」として2000万円が配られ物議をかもしやら、すったもんだの選挙戦となった。

そして、自民党は改選前に247あった議席を191に減らし、公明党も32あった議席を24に減らすとい

う惨憺たる結果で、相対的に98議席から148議席に躍進させたのは立憲民主党だった。

そうして「戦いすんで日が暮れて」、落ち着くかと思いきや、何やら胡散臭い議席の取り合いと、過半数をめぐる駆け引きが喧しい状況が続いた。

候補者や政党は、その「数」をめぐる争奪戦に血眼になり、どうやら元の木阿弥、国民生活とは程遠い政治家同士の抗争が勃発しているように思えてならない。

今回の解散・選挙に先駆けて、2014年8月29日に、かの「日本学術会議」政治学委員会・政治学委員会政治過程分科会なる組織が、「各種選挙における投票率低下への対応策」と称する提言書を発表している。

曰く「先進諸国では各種選挙における投票率低下が共通の現象であり、民主主義においてこうした投票

率の低下と政治的無関心の増大は、政治の民主主義的正統性を揺るがしかねない問題」であるとし、その原因を「とりわけ国会議員などに対する国民の不信感は強く、それが政治不信につながっている」と断じている。

確かに、1946（昭和21）年に行われた戦後初の総選挙における投票率は72・08%だったが、今回の場合、投票率は53・85%で戦後3番目の低さとなっている。残念ながら、これは先進諸国共通の問題であるようで、1990年代と2010年代のOECD諸国の投票率の比較では、平均で約75%から約68%に下がっており、日本のみならず全体的に低下傾向にあるようだ。

国別の投票率で99%を越えて1位のベトナムでは、代理投票<sup>1</sup>が横行しているといい、さらに上位に位置するシンガポールやオーストラリア

では、投票しないと罰金が課される制度があるという。

18位のスウェーデンを筆頭とする北欧諸国のように幼少期から政治と投票に関心が持てるように、子どもたちの教育に力を入れている国もあり、そうした結果として高い投票率が維持されるのが理想的な姿だろう。

## 白票や棄権にも意味がある

日本での一例だが、2014年に「大阪都構想」を掲げた現職の橋下徹市長（当時）が、その是非を市民に問うとして辞職。そして実施された、いわゆる「出直し選挙」では過去最低の23・6%という投票率を記録した。この時には、選挙の正当性が問われ、メディアが無効票の動向に注目したこともあり、大阪市の選挙管理委員会が開票直後に白票数を明らかにした例がある。市の選挙

管理委員会によれば、無効票は、投票総数の13%をこえる6万7000票あまりと異例の多さで、このうち4万5000票余りが投票用紙に何も書かれていない「白票」だったという。

ただし必ずしも「白票」が民意を反映したものではないことも確かだ。選挙管理委員会は開票結果とともに「無効投票」数を発表しているが、それがイコール「白票」数とはならないことは確かである。

前出の「日本学術会議」も、投票率を向上させるための提案として、

- (一) 政治活動・選挙運動の自由化促進と、政治における透明性の増大
- (二) 投票所の設営に関する規制の緩和などの技術的方策
- (三) 国民各層に対する主権者教育の充実

- ① 初等中等教育における「主権者教育」重視への転換
  - ② 生涯学習としての「主権者教育」の体制の確立
- を掲げている。

有権者が政治に対する関心を保ち主権者としての意識を有するためには、その政治に対する一定の信頼と

理解とが必要なのである。

### 棄権と無効票を活かす

そこで提案なのだが、いっそ投票における棄権と白票を、ひとつの有権者の意思表示とするのはどうだろうか。

例えば、投票率が過半数を切つてしまった場合は、その選挙自体を無効とし、まさに「出直し選挙」を行うようにするといった方法が考えられるだろう。



白票もまた1票

さらに、選ぶべき候補者が存在しないという声をきちんと反映できるように投票用紙を準備し、「白票」あるいは「該当者なし」という票をきちんと数え、その数に満たない得票数の候補者は、順位に関係なく落選とするような考え方である。

もちろん、選挙がやり直しとなれば、莫大な経費が無駄になり、貴重な税金が無駄となってしまう。そのことを事前に周知徹底し、それでも民意が「NO」ならば、甘んじてその民意を受け入れようという発想である。

また投票用紙に「該当者なし」を用意することによって、当選者を選別する案だが、1回目は執行猶予とし、2回連続で該当者なしの票数を下回った場合には、当選を取り消すなどの措置を講じるようにすれば、執行猶予の政治家は躍起になつて仕事をしようになるのではないだろうか。そうならば、選挙のた

びに有権者が味わう、お願いするときだけはお辞儀が多く腰が低い、当選した後は「政治家先生」に収まる変わり身の早さを、少しは抑制できるかもしれない。

そういえば、前出の「日本学術会議」政治学委員会・政治学委員会政治過程分科会の提案書には、委員長として自由民主党の猪口邦子参議院議員の名前が記されていた。もちろん、日本大学国際関係学部客員教授という政治学者としての顔も持ちだが、政治家がこの提案書の代表となつていることに違和感を覚えるのは筆者だけではない。

冒頭の佐藤愛子氏の著書であるが、その元となつたのは、おそらく『戦友』という軍歌だろう。その歌詞は

戦いすんで日が暮れて  
さがしにもどる心では  
どうぞ生きて居てくれよ  
ものなど言えと願うたに  
と続けられている。

政治家諸氏は、選挙のたびに「命をかけて」などと連呼するが、まさに真剣勝負の選挙と政治を見せていただきたいと願う。